|  |  |
| --- | --- |
|  | 小千谷旅する案内帳「千の谷の物語と雅色の郷　小千谷」 |

　　の

ガイド案内

* 屋号　　　東　忠兵衛（ひがし　ちゅうべえ）の名にちなんで付けられた。
* 創業　　　江戸時代の半ば頃、約２５０年くらい前
* 指定文化財　　　国登録有形文化財に平成27年指定を受ける
* 本館　　木造３階建ての内2階までは江戸末期建築。３階大広間は昭和３９年に増築された。外観は建ちの高い真壁造で、１、２階に大小１０室ほどの客室を配し、要所に良材を用いた座敷飾りを備える。小千谷縮をはじめとする麻製品の繁栄を伝える料亭建築である。
* 別館　　建築年代は詳細を欠くが、昭和初期。（戦前期の古写真に写ることからの推測）敷地形状により本館と斜めにせつぞくし、スキップフロア状の動線で連絡するため、変化に富んだ空間構成を持つ。１階は広間２室、２階は大広間とし、庭に面して縁を廻らし、開口をひろくとる。座敷飾りは大振りで、かつ洗練された意匠になる。瀟洒で上質な和風建築である。
* 上の蔵　　建築年代は明治前期、昭和前期に改修。本館北奥部と妻面を接して建つ、切妻造の2階建土蔵。上下階とも両妻面を張り出し、外壁は主体部２階を漆喰壁とする他は下見板をはる。戦前に１階をビリヤード室としたため洋風持送（もちおくり、梁を受ける金具）などの内装を持ち、北妻に半切妻屋根の玄関を設ける。料亭に付属した娯楽施設の遺構である。
* 慶応４年5月2日の「小千谷談判」が決裂してしまった河井継之助は再度の会談を取り次いでもらおうと従者の二見虎三郎にその件を託し、遅い昼食をここの「梅の間」でとりました。長岡藩の家老に対して奉公人に給仕さるわけにいかず、家の「ふさ」という娘に給仕をさせた。彼女はその時のことを子孫によく語っていたそうだ。その場面が新聞の連載の時には書かれていたが、単行本になった時にはカットされてしまった。

エピソード

* 平成１６年１０月23日に小千谷を襲った大地震によってここ東忠も大きな痛手を負った。当時の当主は廃業を思い、支援者を訪ねたところ話を切り出す前に「東忠」を閉めてはならないと諭されたそうだ。支援者達も被害を受けていたにも関わらず、多くの人が再建に向けて支援をした。そして、翌年の4月には再度営業を再開させた。
* 平成28年９月末で経営難から休業したが、閉店を惜しむ市民の声を受けて、（財）「小千谷産業開発センター」が建物を取得、運用を（株）ノブサーズに委託することで営業を翌年の5月１日に再開させた。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　メモ